

<論文>

ジンメルの影響圏における ゴフマン社会学

薄 井 明*

抄 録：本論文で筆者は、アーヴィング・ゴフマンがゲオルク・ジンメルの直接的そして／あるいは間接的な影響の下で自らの社会学理論を構築していったという仮説を検証する。レヴァインらの知見に基づき、筆者は、ゴフマンが隠れジンメリアンであったという仮説を検証し、そして、ゴフマン社会学がグスタフ・イッヒハイザーをはじめとするジンメリアンの理論の影響を目立たない形で受けてきたという新たな仮説を提出する。

キーワード：ゴフマン、ジンメル、ジンメリアン、イッヒハイザー

1. 序—問題提起

筆者は、ゴフマン社会学の学説上の系譜を論じた以前の論考において「ゴフマンは隠れジンメリアンであったのではないか」という仮説、すなわち「一見してジンメル社会学の影響を受けていそうなゴフマンが、じつは、その見かけより深く広範囲にジンメル社会学の影響を受けていたのではないか」という仮説を提出し、その一定の論証を試みた（薄井 2013）。

この仮説が決して突飛なものでないことを傍証するものとして、ジンメル研究で有名なアメリカの社会学者レヴァイン（Ronald N. Levine）による指摘を挙げることができる。

「ジンメルにたいそう依拠しているにもかかわらず単に表面的な謝辞しか述べていなかったり、まったく謝辞を示さなかった人として、ブーバー、マルティン・ハイデガー、ノルベルト・エリヤス、カレン・ホーナ、ルイス・ワース、そしてアーヴィング・ゴフマンがいる。」（Levine 2015：68—傍点は引用者）

ジンメルの影響を受けていながらジンメルの名を挙げていないという特徴に関しては、ほかのジンメル研究者も指摘している。次の引用では、ゴフマンの名こそ見当たらないが、意外な社会学者とジンメルとの結びつきが示唆されている。

「表現主義の作家が、存在の哲学者ハイデガーが、ベンヤミンが、社会システムの社会学者ルーマンが、おそらくディスタクシオンの社会学者ブルデューもどこかで、そして歴史家ギョームが、ジンメルを読んできたのだ。名前は挙がらないにせよ、多くの人々がジンメルを読み、読もうとしている。」（北川 1997：32-33—傍点は引用者）

これらの指摘を“援軍”とし、またジンメルとゴフマンの理論的關係を詳細に検討したスミスの論文（1989a；1989b）をはじめ、本論で検討するレヴァインらの論文（Levine. et al. 1976a；1976b）などを含めて判断すると、ゴフマン社会学が外見以上にジンメルから多大な影響を受けていることは大筋で間違いないと考えてよいだろう。ただ、その影響関係については、冒頭で挙げたレヴァインの著書ではその具体的な内実が何も語られておらず⁽¹⁾、ゴフマン社会学のいかなる面においてどのよ

* 大学教育開発センター

うなジンメルの影響があったのかという問題は未解明な部分が依然多い。

ところで「ゴフマン社会学へのジンメルの影響」という場合、何タイプかの影響関係のルートが考えられる。まず最初に思いつくのが「ジンメル→ゴフマン」という直接的でストレートな影響関係であろう。上記のスマスの論文のほか、デイヴィスの論文 (Davis 1997) やゲアハルトの論文 (Gerhardt 2003)、および筆者の論文 (薄井 2013) は、この直接的な関係を考察したものである。次に想定されるのが媒介的な影響関係で、例えば「ジンメル→パーク→ゴフマン」「ジンメル→ヒューズ→ゴフマン」「ジンメル→パーク→ヒューズ→ゴフマン」といった、主にシカゴ大学の社会学科内の影響関係を考察する方向性である。このルートに沿った論考として、「エチケット」問題を扱ったジャウォルスキの論文 (Jaworski 1997:29-42) や、方法論をめぐるジンメルやケネス・パーク、ヒューズとの関係を検討した内田の論文 (内田 1995) などがある。

「ゴフマン社会学へのジンメルの影響」に関して考えられる影響関係は、この二つのタイプだけなのだろうか。ここに「ジンメルの影響圏」という視点を導入すると、もう一つのタイプの影響関係が見えてくる。すなわち、ジンメルからの直接的な影響や社会学内での媒介的な影響だけでなく、ジンメルの理論を摂取して自らの理論を展開した他分野の理論家 (ジンメリアン) たちの影響をもゴフマンが受けていたのではないかということである。「社会学者ジンメルと社会学者ゴフマン」という狭い問題設定から一步身を引いて俯瞰すればわかることだが、哲学者にして社会学者、美学者その他でもあったジンメルが後世の学問分野に与えた影響は、単に「シカゴ学派の社会学」内に限定されるはずもなく、また「社会学」全般にとどまるものでもなかった。先のレヴァインの引用に挙げられているジンメルの直接的な影響だけでも、その範囲はドイツの哲学 (ブーバー、ハイデガー) や歴史社会学 (エリアス)、アメリカの精神分析 (ホーナイ) に及んでいる。ジンメルから直接影響を受けた思想家として、ほかに、物象化論で有名なルカーチをはじめ、ベンヤミン、アドルノ、ブロッホ、マルクーゼなどドイツの哲学者たちがよく挙げられる (北川 1997: 19-20)。部分的な影響まで入れれば、相当数の人物が列挙できるだろう。

以下、本論では、冒頭で触れたレヴァインをはじめとするジンメル研究者たちが「アメリカ社会学へのジンメルの影響」について考察した論文 (Levine et al. 1976a: 1976b) を導き糸として、まず、筆者が以前に提出したゴフマンの「隠れジンメリアン」仮説の検証をさらに進める。次に、レヴァインらの同論文を手がかりとし、新

たに「ジンメルの影響圏」という考えを導入して、ゴフマンに影響を与えたと考えられるジンメリアンたちのうち、これまでほとんど取り上げられることのなかったグスタフ・イッヒハイザーの理論がゴフマン社会学に与えた影響について考察する。

2. ジンメルのわかりやすい影響とわかりにくい影響

(1) レヴァインらの説の検討

a) 「個人間の知識」論のゴフマンによる摂取

レヴァインらは二号にわたる論文の後編 (Levine et al. 1976b) で、アメリカ社会学へのジンメルの具体的な影響を、「大都市の精神構造」「小集団」「個人間の知識」「闘争」「交換」のテーマに分けて、検討している。これらのうち、ゴフマンの名を挙げ、ジンメルからの影響に言及しているのは、二番目のテーマ「個人間の知識 (interpersonal knowledge)」の中である。やや長いけれども、重要な指摘なので、ここで当該箇所を引用しておく。

「ジンメルは、相互開示を含む [個人間の知識の一引用者] 連続線上の一方の極に秘密 (secrecy) を置いた。もう一方の極には、親密さに代表される完全開示の状態 (the state of complete disclosure) を置いている。その中間にプライヴァシー、配慮 (discreet)、保護域 (reserve) が置かれているが、これらは数多くのほかの社会学者によって探求されてきたものである。アーヴィング・ゴフマンの著作の多くは、人格というものの周囲に、プライベート領域として、所有物その他から構成される種々の球状体が存在しているというジンメルの考えに基づいている。表敬行為 (deference) ——他者がもつこうした球状体に対する尊重を表す行為——という概念に加えて、ゴフマンは、それと相補的な関係にある品格行為 (demeanor) ——人びとが他者から表敬行為を引き出すシンボリックな手段——という概念を設定した。表敬行為の対象には個人が社会的ヒエラルヒーの中で到達した地位が関係しているのに対して、品格行為の対象にはその位置を占める人に社会的地位がそうした表示を許し、その位置を占める人のさまざまなスタイルに応じてそれぞれ用いられる属性を反映している。ゴフマン (1959, 1961, 1963) は、多様な状況において個々人が自分たちのプライベートな領域を保護するために振る舞う様式を数多く析出してきた。すなわち、日常生活においてみられる最小限の侵入行為が、公共の場における行動に代表される節度ある侵入行為が、刑務所や精神病院といった全制的施設でみられる最大限の侵入行為が、それぞれ考察されている。」 (Levine et al., 1976b: 1119-1120)

ここでレヴァインらは、ゴフマンの「相互行為儀礼 (interaction ritual)」論のルーツがジンメルの「個人間の知識」の議論にあり、ゴフマンはそれを独自の形で発展させた論じている。コリンズの指摘 (Collins 1986) 以来、デュルケムの「人格崇拜」論との関連で論じられることが多いゴフマンの「相互行為儀礼」論だが、この理論の、もう一つの重要な理論上のルーツがジンメルの「個人間の知識」論にあるという主張は、筆者が以前の論考 (薄井 2013) で指摘したことに符合する。その箇所を再録しておく。

「例えば1956年の論文『表敬と品行の本性』では、ジンメルから引用している二か所 (Goffman 1967 : 62-63, 65-66) のほかに、引用元の箇所 (Wolff 1950 : 320, 321) の直後でジンメルが論じている社会的地位の『重要性』と『距離』との関係という視角をゴフマンはジンメルへの言及なしに『防衛的回避／表敬的回避』の議論に取り入れている (Goffman 1967 : 70)。一見してデュルケムとラドクリフ＝ブラウンの儀礼論の影響が目立つけれども、『地位』と『距離』との関係という視角は、引用の通り、ジンメル固有のものである。」 (薄井 2013 : 13—傍点は原著者)

もとより、ジンメルの「個人間の知識」論の中にデュルケムの「人格崇拜」論と類似した発想が含まれているだけなら、ゴフマンの「相互行為儀礼」論の源泉となる理論の数が一つ増えるだけである。だが、ジンメルの発想には、デュルケムにはない二つの特長がある。その一つがグラデーション (漸次的移行) の発想とでもいうべきものである。すなわち、デュルケムが儀礼を「積極的儀礼／消極的儀礼」と二分し、片方の「消極的儀礼」を“神聖なものには触れるべからず”式に単色的に理解しているのに対し、ジンメルは、二者間の「地位」の格差と二者間で維持されるべき「距離」の大きさとの相関関係を論じている。「個人間の知識」でみられた漸次的移行の理解の仕方が、「地位」と「距離」の関係の議論にも見出せる。これを継承したゴフマンは、地位と距離の関係に「対称性／非対称性」の軸を加えて、より緻密で複雑な論を展開している (Goffman 1967 : 56-81)。その中で、グラデーションな理解をゴフマンが引き継いでいると思われる箇所を引用しておく⁽²⁾。

「ここで、私たちの社会では社会階級間に重要な差異があることが指摘されるべきであろう。他者のプライバシーに対する配慮が表現される符号が異なるばかりでなく、明らかに、階級が高くなればなるほど、接

触に対するタブーがますます広範で精巧になる。」 (Goffman 1967 : 63)

「行為者の地位が高くなるほど、行為者が表敬的な理由から他者に対してとる距離はますます減少するが、自己保護的距離は増大する。」 (ibid. : 70)

ジンメルの発想のもう一つの特長は、「不可視の球状体 (ideal sphere)」⁽³⁾ という用語で表された、自己の神聖性をめぐる空間的イメージ化にある。「アーヴィング・ゴフマンの著作の多くは、人格というものの周囲には、プライベート領域として、所有物その他から構成される種々の球状体 (spheres) が存在しているというジンメルの考えに基づいている」というレヴァインらの先の指摘は少し言い過ぎだとしても、ソマーの「パーソナル・スペース」概念 (Sommer 1969) を先取りする「不可視の球状体」の考えにゴフマンは早くから着目していること (Goffman 1956 : 45 ; 1959 : 69)、そして、後にエソロジーの研究を盛んに取り入れて、「自己の神聖性」をめぐる議論を「自己のテリトリー」 (Goffman 1971 : 28-61) として展開していることは事実である。そこに、「自己のテリトリー」論のベースになった発想がジンメルの「不可視の球状体」だったという推測が成立する余地があるわけだが、この推測を論証するには別途考察が必要となる。少なくともここでは、ジンメル固有の発想法である空間的イメージ化という発想法の影響をゴフマンが受けている可能性が高いことだけは確認しておこう。

b) 「秘密結社」論のゴフマンによる改変的継承

しかし、「個人間の知識」のテーマにおいてゴフマンが摂取しているジンメルの発想は、おそらく、以上のことだけではない。レヴァインらが「個人間の知識」で論じているのは「相互のステレオタイプ化された他者像」と「秘密と秘密結社」と「プライバシー・配慮・保護域」の三つの下位テーマである。これらの中で彼らがゴフマンと関連づけているのは「プライバシー・配慮・保護域」だけであるけれども、実際は、「秘密と秘密結社」においてもゴフマンはジンメルの発想をかなり取り入れていると考えられる。筆者はこの点を以前に指摘した (薄井 2013 : 12-13)。「秘密」と「自己呈示」とは正反対の現象であるが、場面のリアリティと投企された自己像を脅かすおそれのある種々の「破壊的情報」を、自己呈示する「チーム」構成員たちが共謀してオーディエンスに対して「秘密」にしておくという構造が「秘密結社」の構造に似ている、というゴフマン独特の組み込み方で、「秘密」と「自己呈示」とを統合的に理解している。この「秘密結社」に言及している箇所を、彼の最初の著

書『日常生活における自己呈示』[以下『自己呈示』]から引用しておく。

「もしパフォーマンスを効果的なものにしようと思うなら、これを可能にしている共同作業の範囲と性格は隠蔽され、秘密にされたままであることが多い。したがって、チームは何ほどか秘密結社の性格をもっている。」(Goffman 1959 : 104—傍点は引用者)

「秘密と秘密結社」の問題は、この箇所の前後のほかに第4章「外見と異なる役割 (discrepant roles)」で取り上げられ、「秘密」の諸類型や「破壊的情報」全体における「秘密」の位置づけなどが論じられている。その中でも特に「“部内”秘密 (“inside” secrets)」に関する記述は、ジンメル社会学との更なる親和性を推測させるものである。

「“部内”秘密と呼べるものがある。それは、その秘密を所有していることが、その個人がある集団のメンバーであることの印になり、その集団が“内情に通じて”いない人たちとは切り離された別の集団であると感ぜさせる種類のものである。部内秘密は、主観的に感じられた社会的距離に客観的で知識に基づいた内実を与える。一定の社会組織内における情報のほとんど全てはこの種の排他的機能を多少とももち、他の人には関わりのないものと見なされる。(Goffman 1959 : 143—傍点は引用者)

傍点を付した箇所の内容は、「秘密結社」を特徴づけるものであると同時に、「境界設定」機能という面で、「階級ステータスのシンボル」としての「流行」の機能などと共通性をもつものでもある。すなわち、ここには、階級ステータス・シンボルの読解を通じた「内集団」成員間の連帯と「外集団」成員の排除という基本構図(薄井 2013 : 13)との相同性が見出されるのである。ジンメルの「流行」論文から該当箇所を引用しておく。

「流行は同じ階級にある人びととの結合、同じ階級によって特徴づけられた仲間集団の均一性を意味し、他方でまさにそのことによって、他の全ての集団の排除を意味する。」(Simmel 1904 : 134)

こうした解釈が単に穿った見方にすぎないのか、それとも、このように穿った見方のようにみえる次元にまで掘り下げなければ浮かび上がってこないほどゴフマンがジンメル社会学を摂取している「痕跡」がわかりにくいのか、のどちらかである。ゴフマンが「ジンメルにたい

そう依拠しているにもかかわらず」(Levine 2015 : 18)ジンメルの名を挙げない一人であったとすれば、後者の可能性は十分あり得る。少なくとも、ゴフマンが「隠れジンメリアン」だったという見方で解釈していくと、いくつもの異なる“顔”をもつようにみえるゴフマン理論の深層に、共通した“骨格”が透けて見えてくる、という利点がある。こうした“検出”機能が「ゴフマンの隠れジンメリアン」仮説にある以上、明白な反証がないかぎり、この仮説を保持しておく価値はあるだろう。

(2) ジンメリアンとしてのイッヒハイザーの影響

先に挙げたレヴァインらの論文で、「個人間の知識」のテーマには、さらにもう一つ、「相互のステレオタイプ化された他者像」という下位テーマがあり、そこでグスタフ・イッヒハイザー (Gustav Ichheiser)⁽⁴⁾ の名が挙げられ、アメリカ社会学への影響が論じられている。

イッヒハイザーに関していえば、ゴフマンとの関連が取り上げられることはほとんどなく、あってもせいぜい「現象学とゴフマン」といった文脈で引き合いに出される程度であった (Raab 2008 : 55)。レヴァインらの論文でも、ゴフマン社会学へのイッヒハイザーの影響については一切触れられていない。しかし、ゴフマンを起点として見てみると、「イッヒハイザー→ゴフマン」の影響関係はかなり重要なものだと考えられる。例えば、ゴフマンの生活史を詳しく調べ上げたヴァンカンは、ゴフマンがイッヒハイザーから受けた影響に関して、以下のように述べている。

「メンドロヴィッツ (Saul Mendlovitz) [シカゴ大学大学院で再会したゴフマンの幼なじみ—引用者] は亡命オーストリア人のグスタフ・イッヒハイザーを見つけ出した。イッヒハイザーはわずかなお金を得るためにシカゴ大学で宗教社会学を講義していた。本当は偉大なるフッサール現象学派の学者だったが、世間的には落伍者だった。彼が全ての点で攻撃のすぎたからである。メンドロヴィッツはイッヒハイザーと仲良くなることに成功し、彼の著書と論文を全て読むことができたが、それらはメンドロヴィッツによってゴフマンに伝えられた。1949年の『アメリカ社会学雑誌』の付録に「人間関係における誤解：誤った社会的知覚の研究」のタイトルで出版されたイッヒハイザーの長大な論文がゴフマンのインスピレーションの源泉の一つになったことは間違いない。」(Winkin 1988 : 30)

ただ、ヴァンカンがイッヒハイザーの論文がゴフマン社会学へ重要な影響を与えたことと断言するのみで、どの部分にどのような影響を与えたのかは全く述べていない。

だが、彼の指摘自体は間違っていないと思う。ゴフマンがイッヒハイザーの名前を挙げ、文献に言及していることだけが根拠ではない。それ以上に、「ジンメル→イッヒハイザー→ゴフマン」という影響関係を想定することで、ゴフマンの相互行為秩序論における主に二つの点での理論的系譜が明確になることがその理由である。二点の理論的系譜とは、「表出－印象」についての議論と、「カテゴリーに基づく同定」という視角である。

a) 「表出」－「印象」の位相と両者の非対称性

直接的な影響関係の証拠となる「引用」や「言及」でいえば、ゴフマンはPh. D. 論文 (Goffman 1953) と最初の著書 (Goffman 1956; 1959) において、イッヒハイザーの名を挙げて、上記の論文を参照している。直接的な言及は、以下の二つの箇所である。

「しかし、もちろん、この種の探知作業は非専門職的な状況でもつねに行われている。すなわち、あらゆる相互行為において、どの参加者も患者〔被観察者－引用者〕であり医師〔観察者－引用者〕であるのだ。イッヒハイザーの用語法を使っていえば、ある人の表出 (expression) の源は、他者にとって当該人物に関する印象 (impression) の源になる。²

² グスタフ・イッヒハイザーは、1949年9月の『アメリカ社会学雑誌』付録 (シカゴ: シカゴ大学出版, 1949年) に掲載された論文『人間関係における誤解』のpp.6-7 で表出と印象の違いについて明確に述べている。」 (Goffman 1953: 73—下線は原著者、傍点は引用者)

「イッヒハイザーの用語を使っていえば、個人は行為しないわけにいかない結果、意図的または非意図的に自分自身を表し (expresses)、他者たちの側も、その個人から何らかの仕方で印象を受け (impressed) ないわけにはいかない。」 (Goffman 1956: 2; Goffman 1959: 2—傍点は原著でイタリック体)

「印象管理 (impression management)」の用語で一躍有名になったゴフマンの著書『自己呈示』だが、「印象」と対をなす「表出〔表現〕 (expression)」および「表す (express)」 「表出的な〔に〕 (expressive[ly])」の語は、『自己呈示』 (Goffman 1959) だけでも九十箇所ほど登場し、それ以外の著書でも頻出するゴフマン社会学のキーワードの一つになっている (Goffman 1967: 1969)。

しかも、ゴフマンが「表出」の用語で括ろうとしている外延は相当に広く、それがイッヒハイザーの「表出」論での記述との類似性を推測させるのである。ゴフマン

のいう「表出」概念には、表情・ジェスチャー・動作から読み取られるパラ言語的な情報だけでなく、服装や位置取り、居所が発散する情報なども含まれているのである。「居所 (location)」に関してゴフマンは、Ph. D. 論文で、以下のような事例を挙げている。

「『居所』パターンとでも呼び得るものがある。ある人物の家、事務所、仕事場の調度品や装飾品；家の大きさ、様式および維持状態；家の周囲の外観——これらは全て、受け手が特定されていない記号の重要な源であり、その人物について暗示的な事柄を語るものである。」 (Goffman 1953: 120)

この記述から連想される記述がイッヒハイザーの当該論文の本文冒頭の記述である。そこに記述されているのは、彼が本を通して想像したある作家のイメージが、その作家の家に招待されたとき、通された居間の調度品を見て崩れ去り、さらに作家本人に直接会って話をしているうちに再度そのイメージが変容していく過程である (Ichheiser [1949]1970: 12-13)。イッヒハイザーは、このエピソードを、筆跡とパーソナリティとの関係が当初予想していたより複雑であることを説明する例として挙げているが、「他者のイメージ」を形成する際の手がかりとして個人の身なりや話し方だけでなく、その人が住んでいる家の調度品⁽⁵⁾も重要な情報となるというこの視点は、ゴフマンが『自己呈示』において「オモテ (front)」の構成要素として「個人的外見 (personal front)」と「舞台装置 (setting)」 (Goffman 1959: 22) を指摘していることと親和的である⁽⁶⁾。

さらに、イッヒハイザーの「表出－印象」論の独自性は、表出と印象の本質的な不一致性を指摘しているところにもある。この視点は一方で、ゴフマンの「印象管理」概念との関連性を推測させる。例えば、次の引用箇所の記述は、かりにゴフマンの『自己呈示』に引用されていたとしても違和感を感じさせないだろう。

「内的パーソナリティ、態度、意向、性向と外的パーソナリティとの間には、つねに一定程度の不一致が存在している。人間関係において、私たちはいくつかの要因による率直な表現をつねに抑圧しなければならないし、または少なくとも修正しなければならない。この抑圧や修正は、礼儀作法のような、多少とも一般的に適用された表出の慣習から、荒削りの、または微妙な偽りと偽善の諸形態を経て、完璧な嘘と種々の形態の詐欺にまで及んでいる。」 (Ichheiser [1949]1970: 19—傍点は引用者)

その一方で、イッヒハイザーの「表出－印象」論は、彼が指摘した対人知覚における「塵－梁のメカニズム」を介して、ゴフマンの「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」(Goffman 1959: 9) の説につながっていると考えられる。前掲の論文でレヴァインらは、イッヒハイザーの「塵－梁のメカニズム (mote-beam mechanism)」に関して、次のように説明している。

「イッヒハイザーの数多くの貢献のうちで述べておくべきなのは、彼が『塵－梁のメカニズム：その特質が私たちの中にあるのに知覚せず他者にあると知覚し、その特質をあたかも他者に特有のものであるかのよう¹に知覚するメカニズム』(p.92)を確認し、ステレオタイプに関する慣習的な見方に対抗するという見込みのない議論を展開したことである。」(Levine et al. 1976b: 1118)

筆者は以前、対面的相互行為における「自己に関する情報」をめぐる観察者の優位性という「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」(Goffman 1959: 9) の発想の起源が明らかでないとし、「Ph. D. 論文でこの問題に初めて触れた際には、『非対称性』の議論を引き出すのに読み込みが必要なジンメルの一節を引用している」(薄井 2013:11-12) と指摘した。つまり、この「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」という考えがジンメルの理論を直接的な源泉としているとするのは若干無理があるという意味合いである。

イッヒハイザーの「塵－梁のメカニズム」は、防衛機制の一つである投影のメカニズムを組み込んで、集団間の「偏見」の問題をより深く理解するために考案されたものであろう。しかし、ゴフマン特有の改変的な摂取法⁽⁷⁾を考えれば、「塵－梁のメカニズム」を「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」へと組み換えていったという推測は十分に成り立つ。ゴフマンの記述では、この発見をジンメルの所説から導き出したように書いているけれども (Goffman 1953: 81)、実際は、ジンメルの所説に触発されてイッヒハイザーが考え出した「塵－梁のメカニズム」を通して、ゴフマンはジンメル社会学に含まれていた発想を再発見し、「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」の論拠として言及したのではないだろうか。このように、ジンメルとゴフマンの間にイッヒハイザーのを介在させれば、三者の関係は無理なく結びつき、ストーリーとしてはより自然になる。

b) カテゴリーに基づく同定

イッヒハイザーによるジンメル社会学の継承を論じている箇所⁸で、レヴァインらが指摘している論点⁹がもう一

つある。それは、相互行為場面で他者がどのように人物なのかを捉えるとき、他者をまず「カテゴリー」を通して理解するのが不可避的であるという前提条件の指摘である。「ステレオタイプ化」と連続する、対人認知における類型化・カテゴリー化の問題である。

「これらのテーマのうち最初のもの〔個人間の知識におけるステレオタイプの問題—引用者〕を精緻化したのがグスタフ・イッヒハイザーの優れた力量であった。『他の人たちは個人ではなく社会的類型の見本として知覚し評価する傾向は、ジンメルによれば、いかなる社会に存在する場合でも絶対的に必須の前提条件の一つである』と記し、イッヒハイザーは、彼の死後に『外見とリアリティ (Appearances and Realities)』として編纂された論文集の中で、そうした洞察を、あらゆる人間関係において発生する誤読と誤解の体系的な描出の基礎として利用しようとした。」(Levine et al. 1976b: 1118—傍点は引用者)

現在では特段目新しさは感じないが、当時においては斬新な主張であり、ある程度“発見”的な意義をもっていたといえる。ジンメルの論文「社会はいかにして可能か (Wie ist Gesellschaft möglich?)」で提起された基本テーマを発展させたイッヒハイザーの「類型化・カテゴリー化・ステレオタイプ化」論をゴフマンが摂取した可能性は十分にある。なぜなら、対人認知における「カテゴリー化」に類する用語が「ステイタス・シンボル」をテーマにしたゴフマン最初の公刊論文にすでに登場しているからである。

「定義上、ステイタス・シンボルはカテゴリー的意義 (categorical significance) を伝える。すなわち、それは、そこにうまくとり着いた人の社会的地位を識別するのに役立つ。」(Goffman 1951: 295—傍点は原著でイタリック体)

また、ステイタス・シンボルと正反対の意味作用をもつ「スティグマ」シンボルも、他者に対するカテゴリー的把握という同一線上にあり、両者は対極に位置している。したがって、ゴフマンが「スティグマ」を考察するにあたって「カテゴリー化」の問題から開始しているのは、論の運びとして自然なものだといえる。

「社会は、個人をカテゴリー化する手段と、各カテゴリーの成員がもっていれば普通で自然だと人々が感じる属性のセットをその補完物として確定している。社会的場面は、そこで出会う可能性のある人々のカテゴ

リーを確定している。」(Goffman 1963: 2)

もちろん、対人認知に「カテゴリー化」が不可避的だからといって、人間存在がそれに還元されるわけではない。人間存在が類型として理解される側面とそれを逃れていく側面とを備えた二重的存在であることをジンメルはきちんと押さえている(菅野 2003: 97-104)。この点に関して、ゴフマンは、ジンメルとは若干異なる仕方ではあるが、二重的存在としての人間存在に対応する二種類の同定(identification)を区別している。次の引用は、死去する直前に準備されたアメリカ社会学会会長就任演説原稿の中の一説である。

「ある人が別の人を直に見聞きできるという条件を利用して他者に関して行う性格づけの作業は、二つの根本的な同定の形を軸に組織される。カテゴリーに基づく種類(categoric kind)の同定と個人に基づく種類(individual kind)の同定である。カテゴリーに基づく同定では、他者が一つあるいは二つ以上の社会的カテゴリーに位置づけられ、個人に基づく同定では、その外見、声の調子、名前の言及その他、人物を識別する装置を通して、観察下にある対象人物がその人物固有で他者から区別されたアイデンティティに収納される。この二重の可能性——カテゴリーに基づく同定と個人に基づく同定——は、時代から取り残され隔離された小さなコミュニティを除いて、あらゆるコミュニティにおける社会生活にとって、そして他の種類の社会生活においてもまた、決定的に重要である。」(Goffman 1983: 3-4—傍点は原著でイタリック体)

このように、対人認知における「カテゴリー化」という視角は、ゴフマンが彼の理論展開において最初期から最後期まで保持したものである。こうした見方で、最初の著書『自己呈示』の本文の書き出しを改めて見てみると、ここでも、二重的存在としての人間存在に対応する、カテゴリーに基づく同定とそれ以外の手がかりに基づく同定とをゴフマンがきちんと分別して理解しているように思われる。傍点部が「カテゴリーに基づく同定」にあたり、それに続く記述が主に「表出」的の手がかりに基づく同定に該当すると考えられる。

「他者たちが居合わせる状況にある個人が入ってくると、他者たちは通例その個人に関する情報をその場で得ようとするか、その個人に関してすでに所有している情報を活用しようとする。その際、他者たちが関心を向けるのは、その個人の一般的な社会-経済的地位、自己に関するその個人の捉え方、他者たちに対す

るその個人の態度、その個人の能力、その個人の信頼性などである。」(Goffman 1959: 1—傍点は引用者)

ここで、対人認知における「カテゴリーに基づく同定」をイッチハイザーと無理に結びつける必要ないという意見は当然あり得る。すでに述べたように、彼の発想自体がジンメルの理論に依拠したものであるのだからである。その面では、イッチハイザーはジンメルを引き継ぎ発展させたジンメリアンにすぎない。しかしまた、彼の着目があつてはじめて、対人認知における「カテゴリー化」「ステレオタイプ化」の問題がジンメルの所説の中に再発見され、のちの人々に相応の影響を与えることができたと言うこともできる。すなわち、イッチハイザーの理論がもった“増幅器”のような働きがなければ、ジンメルの中にあつた理論的な展開可能性が見過ごされていたかもしれないということである。それは、ちょうど、ゴフマンによる言及と展開があつたからこそ、デュルケムの「人格崇拜」論が相応の関心を集めたのと類比的である。そして、このようにしてゴフマン社会学の理論的な源泉を明らかにすることは理論の比較の基準点を提供することになり、その基準点との対照によって、影響を受けた側が独自に発展させた部分の識別が容易になる。先行理論の改変的な摂取を得意とするゴフマンの場合、こうした学説史的な遡及の作業は、特に必要なものとなるだろう。

3. 結びに代えて

以上、レヴァインらの論文を導き糸として、筆者の「ゴフマンの隠れジンメリアン」仮説の検証を進め、さらに「ジンメリアンからの隠れた影響」という視点を導入して、ジンメリアンとしてのイッチハイザーがゴフマン社会学に与えた影響を考察した。そうした考察によって、ジンメルの「秘密と秘密結社」論がゴフマンの著書『自己呈示』の理論的骨格に影響を与えている可能性、ジンメルの漸次的変化(グラデーション)の思考がゴフマンにも引き継がれている可能性、ジンメルの「不可視の球状体」がゴフマンの「地位と距離」論および「自己のテリトリー」論に改変的に組み込まれている可能性を示した。次に、「ジンメリアンからの隠れた影響」の一例としてイッチハイザーのケースを取り上げて考察することを通して、ゴフマンの「表出」論や「コミュニケーション過程での基本的な非対称性」論、対人認知における「カテゴリーに基づく同定」論のそれぞれにイッチハイザーの理論が影響を与えた可能性を指摘した。ゴフマンに対するイッチハイザーの影響に関しては、論証不足の感は否めず、しかも他の理論の影響の可能性も排除できない

ため、更なる検証・検討が要求される。だが、ゴフマン社会学の理論上の性格づけに広がりや深みを与えたという点で、イッヒハイザーのようなジンメリアンとの関連づけは、一定の意義をもっていると思う。

なお、レヴァインらの論文で取り上げられながらもゴフマンとの関連性が指摘されていないジンメリアンで (Levine et al. 1989b : 1116)、ゴフマン自身が言及・引用している人物として、ほかに、ストロッドベック (Fred L. Strodbeck) がいる。ジンメル「二者関係」論を発展させたストロッドベックの「夫-妻の相互行為」研究をゴフマンはPh. D. 論文で言及している (Goffman 1953 : 151-152)。また、本論冒頭の引用文でレヴァインがジンメリアンだと指摘しているエリアス (Norbert Elias) についても、同じく彼のPh. D. 論文で触れている (Goffman 1953 : 274)。ただ、彼らへの言及は断片的であり、影響があったとしても部分的だと考えられる。

一方、レヴァインが別の著書で指摘しているように、もしマートン (Robert. K. Merton) が「ジンメルにたいそう依拠している」(1971 : lix) 社会学者だとしたら、ゴフマン理論に影響を与えた重要なジンメリアンの一人である可能性はある。なぜなら、トロント大学時代にマートンの出張講義をゴフマンは聴講し (Winkin 1988 : 25)、折にふれて言及し⁽⁸⁾ (Goffman 1959 : 72 ; 1961 : 19, 86)、晩年のインタビューでは自分の理論的な立場がある意味で近いとまで述べているからである (Verhoeven [1993]2000 : 218)。

筆者は、以前「ゴフマンが隠れジンメリアンであった」という仮説を提起し、本論を含むいくつかの論文でその論証を試みた。だが、本論の後半でイッヒハイザーに関して行ったような学説史研究を進めていくと、以前の仮説とは微妙に異なる仮説の追加が要請される。すなわち、それは、「ゴフマンが隠れジンメリアニアン (a secret Simmelian-ian) であったのではないか」という仮説である。実際のところ、「ジンメリアニアン」なる語は存在しない。「～の信奉者」「～に精通した人」という意味の接尾辞-ianを「ジンメリアン」に付けて、「ジンメリアンを信奉し、それに精通した人」という意味を託した筆者の造語である。

「ゴフマンの隠れジンメリアニアン」仮説。この仮説を導き糸として地道に学説史研究を続けていけば、ゴフマンに影響を与えたジンメリアンの数を増やしていくことは可能であろう。もちろん、こうした作業は必要であるし、筆者としてもある程度続けていくつもりである。しかし、ジンメルだけでなく何人ものジンメリアンの理論をゴフマンが摂取しているということは、もはや影響関係云々の問題ではなく、ゴフマン自身がジンメルおよびジンメリアンたちと親和的な思考法、彼らと共通する

思考法を当初からもっていた可能性を示唆する。すなわち、“白紙状態”のゴフマンにジンメルないしジンメリアンの理論が一方向的に影響を与えたというよりも、ゴフマンの側に、ジンメルないしジンメリアンの理論に共鳴し、それらを主体的に摂取できる理論的素地がすでにあったのではないか、ということである。ゴフマン社会学の学説上の系譜を探る作業は、今後こうした可能性も想定しながら進めていかなければならないだろう。

[注]

- (1) レヴァインは、ほかの著書で、セオドア・ミルズやロバート・マートンとともにゴフマンの名を挙げ、彼らが「ジンメルにたいそう依拠している」(1971 : lix) と述べて、この面での彼らの関心が「小集団の構造的特性を体系的に分類・整理すること」(ibid.) にあったとしている。これに該当するゴフマンの文献として『公共の場における行動』(Goffman 1963) が挙げられているが、具体的にどの箇所でもどのようにジンメルに依拠しているかは一切触れられていない。
- (2) 現象を漸次的変化 (グラデーション) として把握する視角は、このテーマに限らず、ゴフマンの著作の随所にみられる。例えば『自己呈示』には、「一方の極に、パフォーマーが完全に真に受けて自分自身の行為を信じ込んでいるケースがある」(Goffman 1959 : 17)、「もう一方の極には、自分自身の規定演技に全く取り込まれず醒めた態度で臨んでいるケースがある」(ibid.) といった、設定された一つの軸の上を連続的に移動するような理解を示している箇所が数多くみられる。
- (3) この“ideal sphere”には、従来「ある理想的雰囲気」(石黒毅) や「仮想の領域」(浅野敏夫) などの不正確な訳語があてられてきた。“sphere”自体が幾何学で「球体」を表す点からいって、「(個人を取り囲む) 球状をなす空間」の語義を明確にすべきである。また、この場合の“ideal”は「目には見えないが存在する」という意味合いで理解したほうがよいので、「理想的」は不可であり、「仮想の」も不適となる。「(個人を取り囲む) 目には見えないが存在する球状体」という意味で「不可視の球状体」の訳語を暫定的にあてておくことにする。
- (4) イッヒハイザー (1897-1969) は、ポーランド生まれの社会心理学者で、オーストリア現象学の流れをくんでいた。ユダヤ人であったためナチスの台頭によりイギリスに亡命し、さらに1940年にア

メリカ合衆国へ亡命した。カール・マンハイムからシカゴ大学のルイス・ワースへの紹介状をもっていて、おそらくこの年からシカゴ大学に来て働くが、なかなか常勤の研究職・教育職に就けず、生活はかなり困窮していた。さらに精神病院への入院も経験している。イッヒハイザーの支援者の中には、のちにゴフマンの師となるエヴァレット・ヒューズ (Everett C. Hughes) もいた。

- (5) 「調度品 (furnishings)」の問題は、ゴフマンにとって、思いのほか重要だったのではないかと筆者は考えている。ゴフマンの修士論文の第11章の題名が「居間の調度品」であり、しかも、当初の修士論文の構想が大きく転換するきっかけになったものだと推測されるからである。この点に関しては (薄井 2011 : 71, 72) を参照のこと。
- (6) 「個人的外面」と「舞台装置」が合体して「オモテ」を構成するという発想には、もう一つ、ケネス・バークの「行為者－場面比率 (the agent-scene ratio)」の考えも影響していると推測される。しかし、イッヒハイザーによるこの描写は、ゴフマンがPh. D. 論文で言及している箇所と同じ章の直前に位置し、ゴフマンがこの箇所を読んでいたことは確実である点からいって、一定の影響があったと考えても不自然ではない。
- (7) 先行理論・概念をゴフマンが独自の形で改変して自らの理論に組み込む手法に関しては、筆者の以前の論考 (薄井 2012 : 11 ; 2013 : 14-16) を参照のこと。
- (8) マートンからゴフマンが引き継いだのは、すぐに目につく「役割」理論だけでない。筆者は考えている。ゴフマンが『ステイグマ』において引用符付きで言及している「可視性 ("visibility")」 (Goffman 1963 : 48) は、マートンが『社会理論と社会構造』でジンメルの名を挙げながら論じているものである (Merton [1968]1949 : 373)。

[文献]

- Collins, Randall, 1986, "The Passing of Intellectual Generations : Reflections on the Death of Erving Goffman," *Sociological Theory* 4, 1 : 106-113.
- Davis, Murray S., "Georg Simmel and Erving Goffman : Legitimizers of Sociological Investigation of Human Experience," *Qualitative Sociology* 20, 3 : 369-388.
- Gerhardt, Uta, 2003, "Of Kindred Spirit : Erving Goffman's Oeuvre and Its Relationship to Georg Simmel," in A. Javier Treviño (ed.), *Goffman's Legacy*, Rowman & Littlefield Publishers.
- Goffman, Erving, 1951, "Symbols of Class Status," *The British Journal of Sociology* 2, 4 : 294-304.
- , 1953, "Communication Conduct in an Island Community," unpublished Ph. D. dissertation, Department of Sociology, University of Chicago.
- , 1956, *Presentation of Self in Everyday Life*, University of Edinburgh, Social Sciences Research Centre.
- , 1959, *Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday Anchor.
- , 1963, *Stigma : Notes on the Management of Spoiled Identity*, Penguin Books.
- , 1967, *Interaction Ritual : Essays on Face-to-face Behavior*, Doubleday Anchor.
- , 1969, *Strategic Interaction*, University of Pennsylvania Press.
- , 1971, *Relations in Public : Microstudies of the Public Order*, Basic Books.
- , 1983, "The Interaction Order," *American Sociological Review* 48, 1 : 1-17.
- Ichheiser, Gustav, [1949]1970, *Appearances and Realities : Misunderstanding in Human Relations*, Jossey-Bass, Inc., Publishers.
- Jaworski, Gary D., 1997, *Georg Simmel and American Prospect*, State University of New York Press.
- 菅野 仁, 2003, 『ジンメル・つながりの哲学』, 日本放送出版会.
- 北川東子, 1997, 『ジンメル—生の形式』, 講談社.
- Levine, Ronald N. (ed. and tr.), 1971, *Georg Simmel : On Individuality and Social Forms*, The University of Chicago Press.
- , 2015, *Social Theory As a Vocation : Genres of Theory Work in Sociology*, Transaction Publishers.
- Levine, Ronald N. et al., 1976a, "Simmel's Influence on American Sociology. I," *American Journal of Sociology* 81, 4 : 813-845.
- , 1976b, "Simmel's Influence on American Sociology. II," *American Journal of Sociology* 81, 5 : 1112-1132.
- Merton, Robert K., [1968]1949, *Social Theory and Social Structure*, The Free Press.
- Raab, Jürgen, 2008, *Erving Goffman*, UVK Verlagsgesellschaft mbH.
- Simmel, Georg, 1904, "Fashion," *International Quarterly* 10 : 130-155.

- Smith, Gregory W. H., 1989a, "Simmelian Reading of Goffman," unpublished Ph. D. dissertation, Department of Sociology and Anthropology, University of Salford. (<http://usir.salford.ac.uk/14705/1/D092734.pdf>)
- , 1989b, "Snapshots 'sub specie aeternitatis' : Simmel, Goffman and formal sociology," *Human Studies* 12 : 19-57.
- Sommer, Robert, 1969, *Personal Space : The Behavioral Basis of Design*, Prentice-Hall, Inc..
- 薄井 明, 2011, 「ゴフマン社会学の脱皮の跡—彼の修士論文(1949)に関する一考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第18号.
- , 2012, 「社会階級論の磁場の中のゴフマン社会学—彼の最初の公刊論文(1951)に関する一考察—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第19号 : 1-16.
- , 2013, 「ゴフマンの『隠れジンメリアン』疑惑—従来のゴフマン理解の見直し—」, 『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第20号 : 7-20.
- 内田 健, 1995, 「『ゴフマネスク』とは何か?—E. ゴフマンの著述スタイルをめぐって—」, 『早稲田大学人間科学研究』第8巻第1号.
- Verhoeven, Jef C., [1933] 2000, "An Interview with Erving Goffman, 1980," in G. Fine & G. Smith (eds.) *Erving Goffman* [1], Sage.
- Winkin, Yves, 1988, *Erving Goffman : Les Moments et Leurs Hommes*, Seuil/Minuit.
- Wolff, Kurt H., 1950, *The Sociology of Georg Simmel*, The Free Press.

Goffman's Sociology within Simmelian Sphere of Influence

Akira USUI*

Abstract : In this paper, I examine the hypothesis that Erving Goffman had built up his sociological theory under the immediate and/or mediate influence of Georg Simmel. On the findings of Levine and others, I put to test my hypothesis that Erving Goffman was a secret Simmelian and advance a new hypothesis that Goffman's sociology had been inconspicuously influenced by some Simmelians' theories, including Gustav Ichheiser.

Key Words : Goffman, Simmel, Simmelian, Ichheiser

* Center for Development in Higher Education